

---

# それぞれ

kino

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

それぞれ

### 【Zコード】

N9908A

### 【作者名】

kinno

### 【あらすじ】

力力ナとコースケ、それぞれの歩む道。

「裕福な民、その民に彩られた幸せな村、例えばそのような空間にさえ、人間を落とす場所が常にある」

「それ、なに？ クイズなら僕、苦手だよ」

「違うんだ。クイズじゃない。」カカナは微笑みを浮かべる。 「覚えておくといいよ」

「今の？」ユースケは瞳を魅力的に揺らした。 「もう、思い出せない」

ユースケのくつたくのない、愛らしい笑顔。カカナは、一回りも年下のユースケにドキッとした。

「それより、カカナ、一緒に遊ぼう？」

「……そうだね。何をして遊ぼうか？」

「ううん」腕を組んで考えるユースケ。

カカナは必死に笑いをこらえていた。

「なわとび！」ユースケのサラサラした髪が風に揺れた。

「え～また～～～！」

2人の仲は、村人の誰から見ても美しく、また、心地よかつた。

力力ナは村一番の美人だ。僕は力力ナが大好きだし、それはみんなも同じだと思う。でも、僕と力力ナは特別なんだ。2人の間には秘密がある。力力ナの屋敷にある黒い箱。大きく、素敵な、黒い箱。

だから、2人は特別なんだ。箱の中には何が入っているか、それは力力ナしか知らない。でも、他のみんなは箱の存在も知らないんだ。僕は特別であることを神に感謝している。

- - - -

最近は物騒になつてきた、と両親が話していた。人殺しが相次いでいるらしい。母は、僕を心配した。僕は、誰より力力ナのことを心配に思う。

力力ナのためなら何でも出来る。もつと、もつと、彼女を知りたい。

力力ナが家にいないうちを見計らつて、こつそりと忍び込む。

全てを共有出来ればいいな。

そう思つて開いた黒い箱。中には引きちぎられた死体の数々。

何故。

金属音。蝶番が外される。玄関の引き戸が開く音。板張りの渡り廊下。

座敷。

足音が近づいてくる。僕は息を止めた。

戸が開いて隙間から眩しい光り。目が眩む。明かりに慣れると、そこに立ち尽くしていたのは、力力ナだつた。力力ナの青白い髪は、この世のものかと疑うほど不思議な魅力に満ちていた。

「ユ、ユースケ？」力力ナは反射的に口に手を添えた。

瞳はこれ以上ないほど見開いている。

「……力力ナ」

沈黙が訪れる。その重さに首の骨が折れそうだ。

僕は、力力ナに何て言つたら良いのだろう。果てしない沈黙に、発音の仕方を忘れてしまいそうだ。……いや、そんなものさつさと忘れてしまいたい。綺麗サッパリ忘れられたら、どれだけ幸せだろう。

もしそうなつたら、僕はきっと、神様に投げキッスをして、毎朝のお祈りは欠かさなくなるに違いない。判然とした未来に希望を見出して、大笑いするかもしない。

……神様。果たして、僕と彼女が救われるすべはあるのでしょうか？

「見たんだね？」そう言つた力力ナの表情は、彼女の背後から差す明かりが邪魔して良く見えない。

僕は何も言わずに、ただ頷いた。

「秘密って言つたのに…」力力ナはユースケの方へ一步近づく。

「力力ナ、何で？」僕の声は震えていた。

「何で？ そんなの殺したいから殺したに決まつていいでしょう？ それ以外の理由なんて、全て言い訳に過ぎない」

「この人たち、力力ナになんかしたの？」ユースケは箱を見て言った。

「まあ、……したね。……ユースケなら、わかってくれる？」

「人殺しなんてダメだ」ユースケの声は、今にも消え入りそうなほど、か弱い。

「そうかな？」力力ナは、また一步、ユースケに近づく。

「世界中の人がそう言つ

力力ナは、苦笑した。

「それで、私にどうじろつて？」

「何でこんなこと……」

カカナは、コースケの背丈に合つよつに、ひざまずいて額にキスをした。

「」いちらは、私の家に喜んで入つてきて、喜んで殺されたのさ  
カカナは箱を横目に言った。

「」の家に来た全員を殺したの？」

「大半は死にゆく。だけど私は、君を殺していない。」

「何で？」

カカナは僕の言葉に首を少しだけ傾け、肩を竦めた。

「コースケには、まだ、わからないことが多い」カカナは片目を細める。「フライラデルフィアがヒーローを生むのと同じ理由で、私はこの村のヒールなんだ」

「わからないよ」

「わざとやう言つてる。今、君がわかつたつてしようがないことだから」

「わざと？」

「そう。でも、いざれわかる。覚えておきな。あと、そうだね……」力力ナは箱の縁に上品に座つた。「君が好きだ」

コースケは一瞬あっけにとられたように力力ナを見つめ、そして、笑つた。

「うわあ～、それ卑怯

「笑うとこころじやないよ。警察を呼んできて……、私はここで待つているから」

コースケは一度頷くと、走つて行つてしまつた。

力力ナはしばらくそのまま動かなかつた。そして、微笑む。

「わからない」コースケの声色を真似して言つた。

力力ナは大きく背伸びをして、箱の中にあつたナイフを握りしめた。

戻つて来たときには、力力ナは血にまみれて死んでいた。手首を切つたらしい。

僕は力力ナの死で、勘違いしていた幾つかのことに気づいた。

力力ナは、村人にはむたがれるような存在だつた。みんな口には出さないだけで、それはあからさまだつた。とてもかわいそつだ。村人も力力ナも。

力力ナが嫌われる理由は、まだ僕にはわからない。そして、これからもそれは変わらないだろう。彼女がいざれわかる、と言つた言

葉は嘘つぱちだ。

僕はあれから、更に力カナの影を追うようになった。人間を殺すことにもなれてきた今だからこそ言える。

「僕は好きだよ、力カナのこと」

(後書き)

ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9908a/>

---

それぞれ

2011年1月15日14時25分発行